



『水兵ビリー・バッド』(翻訳
その1)(奥西晃教授退職記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011058

『水兵ビリー・バッド』（翻訳 その1）

村上陽介

1

蒸気船がまだ現われないころには、いや、そのころには今よりもっと頻繁に、というべきかもしれないが、かなりの規模の港の波止場をぶらぶら歩いていると、それがどこの港であるにせよ、上陸許可をもらい、晴れ着をま^かって陸に上がった赤銅色の船乗り——軍艦あるいは商船の乗組員——の一团にときおり注意を引かれたものだった。時には、彼らは、自分たちと同じ階級ではあるが、ひととき優れた体躯をもった人物の横に並んだり、あるいは護衛するかのよう^かに彼をすっきり取り囲んだりしていた。その人物が仲間とともに進んでいくさまは、牡牛座の一等星、アルデバランが、同じ星座の明るさの劣る星々に囲まれて運行するかのごとくであった。その際立った人物こそ、軍艦も商船もどちらも今よりもっと華やかだった時代に「ハンサム・セイラー」と呼ばれた人物であった。彼にはうぬぼれているような様子はまったく見てとれず、むしろ生まれながらの王者のもつ、気取らぬ、飾り気のない態度で、仲間の水夫たちが自然に表わす敬意を受け入れているようであった。

やや目覚ましい一つの例を私は思い出す。あれはリバプールでのことであったが、もう半世紀も前、プリンス波止場の大きくて黒ずんだ街路壁の陰で、私は一人の平水夫に出会った。（この邪魔物はかなり前に取り壊されたのだが。）彼はじつに黒い色をしており、純粹なハムの血を受けついで生粋のアフリカ人に違いなかった。均整のとれた体つきをしていて、身長も平均よりはずっと高かった。首の周りにさらりと巻いた派手な絹のハンカチの両端が、あらわになった黒檀のような胸板の上でひらひら舞っていた。両耳には大き

な金の環が吊され、チェックの柄のリボンのついたスコットランド高地風の縁なし帽が彼の形の良い頭部を際立たせていた。それは七月の暑い真昼のことであった。顔を汗で光らせながら、彼は蛮人らしく上機嫌でにこにこしていた。きらりと光る白い歯を見せては、右に左に陽気な洒落をとぼしながら、彼は仲間の船乗りたちの中心になって浮かれて進んでいった。この仲間というのが、いろいろな種族と肌色の男たちを集めたもので、アナカーシス・クローツが一七九二年に開かれた第一回国民議会において「人類の代表」として行進させてもよかったようなグループである。道行く人々がこの黒い神のような男に対して自然に賞賛の気持ちを表わすたびに——といっても、立ち止まってじっと見つめ、そしてたまに讃嘆の声をあげるだけなのだが——この雑多な人々からなる従者たちの態度から、彼らがこの中心人物に対して誇らしげな気持ちを抱いていることが見て取れた。それは、彫刻された巨大な牡牛像の前で信者たちが平れ伏したときに、アッシリアの僧たちがその牡牛像に対して示したにちがいないような誇らしげな気持ちであった。

話を元に戻そう。陸^{おか}で身を飾るときには、時として海のミュラといったふうが多少あったとしても、その当時の「ハンサム・セイラー」は、しゃれたビリー・ビー・ダムを思わせるような面はまったく見せなかった。このビリー・ビー・ダムと呼ばれるタイプの男は、今ではほとんど見られなくなってしまった。しかし、時には出会えることもある。本物よりもさらに面白い人物として、大嵐のときにエリー運河を渡る蒸気船の舵柄を握っていたり、あるいは、こちらのほうが可能性が高いが、曳船道に沿って建っている安い飲み屋でほらを吹いていたりするのだ。「ハンサム・セイラー」は、きまって自分の危険な仕事に熟練しており、多かれ少なかれ強靱なボクサー、あるいはレスラーであった。強さと美しさが相まっていたのである。彼の武勇談は子細に語られた。陸^{おか}では人のために闘う闘士、海の上では代弁者であり、これといった機会にはいつも先頭に立った。ほら、強風のなかで中檣帆をしっかりと縮めている彼の姿が頭に浮かぶだろう。風当たりの強い桁端に馬乗りになり、あぶみに足を置くかのようにフットロープに足を置き、まるで元気のよいブケファロスの馬銜を引いている若いアレクサンダー大王そっくりといった態度で、両手で馬のたずなを引くがごとくに耳ずなをぐっと引いてい

る。雷鳴のとどろき渡る空に牡牛座の牡牛の角でほうり上げられたかのように、素晴らしい姿を見せながら、帆桁に沿って並んで熱心に働いている人々の列に「おおい」と元気に掛け声をかけている。

たいていの場合、「ハンサム・セイラー」の精神的特性は体の作りと一致していた。実際、見た目のよさと力強さが相ともなって男性に見られると、それはいつも魅力的なのだが、精神的特性と調和していなければ、何人かの「ハンサム・セイラー」が容姿と力強さの点で劣っている仲間たちから心から尊敬されたような形で尊敬されることはあり得なかつたろう。

青空のような色の目をしたビリー・バッドは、物語が進むにつれて明らかになるような重要な違いはあったが、少なくとも外見においてはまさしくそのような注目の的であり、また、精神面でもいくぶん同様のことがいえる人物であった。彼は、やがて述べるような状況のもとで、ついにはもっとくだけてベイビー・バッドと呼ばれるようになるのであるが、二十一歳で、十八世紀の最後の十年のそのまた最後の頃の英国艦隊の前檣楼員であった。英仏海峡において、帰航中のイギリス商船から外地へ向かう七十四砲艦である英国軍艦、『ベリポテント号』へと彼が強制徴募されて国王軍に入ったのは、この物語の起きる少し前のことであった。当時のあわただしい時代にはめずらしいことではなかつたのだが、『ベリポテント号』は乗組員がその定員に満たないまま出航することを余儀なくされていたのだ。船内臨検士官ラトクリフ大尉は、舷門でビリーを一目見て即座に彼を徴募することに決めた。それは彼の入念な点検を受けるべく商船の乗組員たちが後甲板に正式に召集される前のことであった。しかも、ビリーだけがラトクリフ大尉に選ばれたのだ。自分の前に他の船員たちが並べられたとき、ビリーと比べると見劣りがしたからか、あるいはまた、その商船の乗組員が人手不足であることを考慮して気がとがめたのか、ラトクリフ大尉は自分が思わず最初に選んだ人物で満足した。その商船の乗組員たちが驚いたことに、そして、それはラトクリフ大尉にとっては非常に満足のことだったのだが、ビリーはまったく異議を唱えなかつた。だが、いかなる異議を唱えていたとしても、籠の中にひよいと入れられたオウゴンヒワの抗議と同じく、たしかに、まったく無駄なことではあつたろう。

ビリーが不平もいわずに黙従するのを見て、それも、機嫌よくといってもよい態度で従うのを見て、商船長は驚き、無言の非難を込めて彼のほうをちらっと見た。この商船長は、どんな職業についている人のなかにもいるような、たとえ卑しい職業についている人のなかにもいるような、立派な人物の一人であった。つまり、だれもが一致して「尊敬できる人物」と呼ぶような人であった。また、こういっても最初に聞いたときに感じるほど奇異なことではないのだが、御し難い雨風との戦いを生涯続けながら、荒波を乗り切ってきた人物ではあっても、この誠実な人物が心底から一番愛したのは、純然たる平和と静寂であった。その他の点についていえば、彼はおよそ五十歳ぐらいで、少々肥満ぎみであり、頬ひげをはやしておらず、顔は気持ちのいい血色をしていた。彼の顔はやや丸顔で、表情には慈悲深い聡明さが見られた。天候が良く、風も航行に好都合で、すべてが順調な日には、彼の声がある音楽的な響きを帯びたのだが、その響きは彼という人間の最も深い部分からそのまま邪魔されずに出てきたもののようであった。彼は思慮分別も誠実さも十分にもっていた。時折これらの美德が彼の心中に過度の不安を引き起こした。航海中に彼の商船が陸に近接している限り、グラヴェリング船長は睡眠を取ることができなかつた。船長によっては重大な責務でもあまりまじめに考えないような人もいるなかで、彼はそういった責務をととても気にしていたのである。

さて、ビリー・バッドが水夫部屋に降りて自分の私物をまとめている間に、がっちりとした体つきをしていてぶっきらぼうな『ベリポテント号』の大尉は、グラヴェリング船長が、この実にはいやな出来事に際して慣例的なもてなしをすることを怠っても一向に頓着することもなく、無遠慮に船長室に入り込んだ。（グラヴェリング船長がもてなしをすることを怠ったのは、考え事をしていたために単にうっかり忘れてしまっただけなのであったが。）いったん船長室に入り込むと、ラトクリフ大尉は、彼の経験を積んだ目で酒の入っている戸棚から酒びんを一つたちまちのうちに見つけ出した。当時の長引いたいくつかの大きな戦争における海軍生活の苦労や危険のすべてをもってしても、五感に訴える楽しみを求める本能を決して弱められることはなかつたような船乗りたちがいたが、実際、大尉もそのうちの一人であった。彼は

いつも忠実にその本分をまっとうした。しかし、本分というものは時には干からびた責務である。そこで、彼は、機会あるごとに、酒という栄養分の多い煎じ薬でもってその乾きにうるおいを与えるのがよいと考えていた。船長室の所有者にとっては、とにかくできるかぎり礼儀正しくてきばきと、強要された接待役を演じるしか道はなかった。酒びんに必要な付属品として、彼は黙ってタンブラーと水差しをこの手に負えない客の前に置いた。しかし、そのときには一緒に飲むの辞退し、平気な様子でいる大尉を暗い表情で見つめていた。大尉は強い酒をゆっくりと水で少し薄め、それからそれを三口でぐいと飲み干したあと、手を伸ばせばすぐに届くくらいの場所に空になったタンブラーを押しやった。と同時に、彼は椅子にゆったりと腰を下ろし、非常に満足して舌つづみを打ち、接待役のほうをまっすぐに見た。

ここで一段落したので、商船長は沈黙を破ったが、彼の声の調子には悲しげな非難の気持ちがこもっていた。「大尉殿、あなたは私から奴らのなかの宝——私の一番良い水夫を取り上げようとしておられるんですよ。」

「わかっている。」と大尉は答え、おかわりをするための準備としてタンブラーを即座に引き寄せた。「わかっているんだ。すまない。」

「失礼ながら、大尉殿、あなたはわかってはおられない。いいですか、あの若者を乗り込ませる前は、私の船の水夫部屋は口論の多い、どぶねずみの穴のようでした。それは本当にこの『権利号』の上ではひどい時代でした。私は心配するあまり、パイプを吸ってもまったく何の慰めにもならなかったくらいです。そこへビリーがやって来ました。カトリックの司祭がアイルランド人のけんかを平和におさめたかのようにでした。だからといって、ビリーは彼らに説教をしたのでもなく、彼らに特に何かいったというのでもなく、また、何かをしたというのでもありません。ある力が彼から出てゆき、怒っている者たちの気持ちを和らげたからでした。彼らは、スズメバチが糖蜜を好むようにビリーを好きになったのです。水夫仲間のうちの一人のやくざ者を除いては。このやくざ者は、凶体のでかい、毛むくじゃらな男で、火のように赤い頬ひげをはやしていました。おそらくは新顔に対する妬みからでしょうが、あんな「かわいくて気持ちのいい奴」には——ほかの水夫に向かっては、彼はビリーをあざけるようにこう呼んでいたのですが——とてもシャ

モほどの気力もないだろうと思って、ビリー相手に厄介なけんかをどうしても起こさずにはおれなかったのです。ビリーは我慢を重ね、気持ちのよいやり方で相手を納得させようとしていました。大尉殿、ビリーは多少私に似ていて、けんかのようなものは何であれ嫌いなんですよ。しかし、ビリーが何をやっても効き目がありませんでした。で、とうとう、ある日の第二折半当直のとき、この「赤ひげ」が他の連中の前で、ビリーにサーロインステーキをどこから切り取るか教えてやるという口実のもとに——彼は以前肉屋だったんですよ——侮辱するようにビリーの肋骨の下をめがけてぐいと突きしたんです。電光石火のごとくすばやくビリーは片腕をさっと振るいました。おそらく彼はそこまでやるつもりはなかったのですが、とにかくその図体の大きい愚か者をこっぴどく殴りつけたのです。きっと三十秒くらいのことだったと思います。いやはや、そのでくのぼうはあまりの素早さにびっくり仰天してしまったのです。そして、大尉殿、信じられますか、「赤ひげ」は今やビリーのことを心底から大好きなのです。もしそうでないとすれば、奴は私が今まで聞いたこともないようなとてつもない偽善者です。ですが、連中はみんなビリーが大好きなのです。なかにはビリーのために洗濯をしてみたり、彼の古くなったズボンを繕ってやったりする者もいます。大工などは暇をみて彼に見事なたんすを作ってやっています。だれもがビリー・バッドのためなら何でもしてやるでしょう。私たちは、一つの幸せな家族なんです。しかし、大尉殿、今もしあの若者が行ってしまうとなると『権利号』の船上がどうなるか私にはわかっています。夕食後甲板に上がって、車地にもたれながら静かにパイプをくゆらせることができる日がまたやってくることはしばらくないでしょう。思うに、そんなことはしばらく起きません。ああ、大尉殿、あなたはやつらの中の宝を連れ去ろうとしているのです。私の『平和を実現する者』を連れ去ろうとしている！」そういいながらも、その善良な男はすすり泣きが起きようとするのをやっとのことで抑えこんだのだった。

「なるほど。」と大尉はいった。彼は一部始終をおもしろがって聞いていたが、今や強い酒でしだいに陽気になってきていた。「なるほど、『平和を実現するもの』、とくに闘う『平和を実現するもの』よ、幸いあれ。そして、闘う『平和を実現するもの』といえば、私の帰りを待って停船しているあそ

この軍艦の砲門から鼻先をいくつかのぞかせている、あの見事な七十四の大砲がそうだ。」と、船長室の窓越しに『ベリポテント号』を指しながら彼はいった。「でも、元気を出すんだ！おい、そんなにがっかりした顔をするな。そうだな、国王陛下のご嘉賞あることを、前もって君に誓おう。陛下はかならずやお喜びになれるだろう。水夫たちが陛下の軍用堅パンを熱心に求めても当然なのに、そうはしないこのご時勢に、また、商船長たちの中にも水夫の一人か二人を海軍のために借りるのを密かに憤慨しているものがあるご時勢に、自分の水夫のなかの精華を国王に進んで引き渡す商船長が少なくとも一人はいることをお知りになれば、また、その水夫というのが、その商船長にひけをとらぬ忠誠心でもって文句をまったくいわないということをお知りになれば、陛下はお喜びになれることだろう。それはともかく、その私の美青年はどこにいったのだろう。」そのとき、船長室の開いたドア口から外を見て、大尉はつぎのようにいった。「あー、来た、来た。なんと、あいつ、たんすを引きずっている。まるで旅行鞆を下げたアポロみたいじゃないか！」それから、船長室を出てビリーの方に歩いて行きながら大尉はいった。「おい、軍艦にそんな大きな箱は持ち込めないぞ。軍艦に積んである箱といえば、ほとんどが砲弾箱だ。お前の持ち物は袋に入れろ。騎兵にはブーツと鞍、水兵には袋とハンモックというのが相場だ。」

たんすから袋への入れ替えが行われた。それから、自分の部下がカッターに乗り込むのを見届けたあとで、大尉も続いて乗り込み、『人間の権利号』から離れた。これがこの商船の名前だったのだが、船長も乗組員たちも船乗りの流儀にしたがって『権利号』と短縮して呼んでいたのだ。スコットランドの港町ダンディーに住むこの船の頑固者の持ち主は、トマス・ペインの忠実な崇拜者だったが、エドモンド・バークのフランス革命批判に対するトマス・ペインの反論の書物、『人間の権利』はしばらく前に出版されており、いたるところで読まれていた。自分の船をこの書物のタイトルにちなんで命名した点で、このダンディーの船主は、同時代の船主であるフィラデルフィアのスティーブン・ジラードにいくぶん似ていた。スティーブン・ジラードは、自分の生まれた国、フランスと、そのフランスの進歩的な哲学者たちに対して共鳴する気持ちを明示するために、自分の船をヴォルテール、ディド

ロなどにちなんで命名したのである。

だが、今、商船の船尾の下をカッターが勢いよく進み、大尉とカッターの漕ぎ手たちが、ある者は苦々しげに、また他の者はにやにや笑いながら、そこに美しく描かれている名前を眺めていたとき、まさにそのときに、新参兵は艇長に指示されて座っていた舳先のところでぱっと立ち上がり、そして、船尾手すりから悲しげに彼のほうを見やっている無言の船員仲間たちに帽子を振りながら、彼らににこやかに別れの挨拶をしたのである。そして、「それから、懐かしの『人間の権利号』よ、お前にもさようなら。」と船そのものに挨拶をした。

「おい、座れ！」笑みをこらえるのに苦労しながらではあったが、大尉は、即座に自分の地位に備わっているあらん限りの威厳を込めて怒鳴った。

たしかに、ビリーの行動は海軍の規律にひどく反するものであった。しかし、それまで彼は海軍の規律を教わったことは一度もなかった。そのことを考慮すれば、最後の船への別れの言葉がなかったなら、大尉はそうまで厳しくとがめることはしなかったであろう。彼は、「人間の権利」について述べたとも受け取れるビリーの挨拶を、別れの言葉というよりは、新参兵がひょうきんな当てこすり、強制徴募一般への当てこすり、そしてとくに彼自身の強制徴募への当てこすりをいおうとしたものと理解したのである。それでも、それがおそらく結果としては風刺となったとしても、とても故意によるものとはいえない。というのも、ビリーは幸いにも、彼の優れた健康、若さ、そして率直な心もたらす陽気さを授けられていたのだが、それでも決して皮肉をいうような性格ではなかったからだ。彼には、皮肉をいう気持ちも悪意をともなう抜け目のなさもなかった。どんなものであれ、二重の意味をもたせたり、当て付けのたぐいをいうことは、彼の性格とはおよそ無縁のことであつた。

ビリーは、天候の移り変わりをふだん受け止めていたのとほとんど同じような態度で強制徴募を受け止めていたようであつた。彼は哲学者ではなかったが、まるで動物のように、自分ではそれとは知らぬまま、ほとんど運命論者であつたといつてもよかつた。彼は、おそらく、自分の仕事が冒険に満ちたものになったことをむしろ気に入っていたらう。それが、今まで経験し

たことのない状況、そして戦争にまつわる刺激的な事柄の始まりを約束していたからである。

『ベリポテント号』に乗船すると、わが商船水夫はただちに上等水兵に格付けされ、前檣楼の右舷の当直団に配属された。彼はすぐに任務に慣れ、その気取らない美貌と、いわば愛想のよい、のんきな態度のおかげで、結構皆に好かれた。会食仲間のあいだでも彼が一番陽気であった。したがって、彼は、他の何人かの水兵たち、『ベリポテント号』の水兵たちのなかで彼と同じように強制徴募された者たちとは、きわめて対照的であった。この水兵たちは、活発に仕事に従事していないときにはときたま、また、第二折半当直に就いていて、黄昏どきが間近にせまってきて物思いを誘うときにはとりわけ、物悲しい気分になりがちであったし、なかには、それが高じて不機嫌になる者もいた。しかしながら、彼らはわが前檣楼員ほど若くはなかったし、少なからぬ人数の者が何らかの形で家庭のだんらんを知っていたに違いない。また、不安な状況のなかに妻と子供を残してきた者もまず間違いなくいただろう。ほとんどの者に、親類知己として認められた人がいたに違いない。一方、ビリーはというと、やがてわかるように、天涯孤独の身であった。

2

わが新入りの前檣楼員は檣楼、そして砲列甲板で快く迎えられはしたが、ここでは、以前、商船のもっと小さな船の水夫仲間のあいだでそうであったような注目の的ではとうていなかった。ビリーがそれまで交わったことがある仲間といえ、あの『人間の権利号』の仲間たちしかいなかったのであるが。

彼は若かった。体躯はほぼ百パーセント発達していたにもかかわらず、外見上、彼は実際よりもさらに若く見えた。それというのも、生まれながらの肌の色の純粹さを保っている点で女性的ともいえるような、いまだにすべすべした顔に、青年期の表情が依然として残っていたからである。ただ、その顔も、船乗り生活のせいで、ユリのように白い肌の色はすっかり抑え込まれ、バラ色も、日焼けした色を通してはっきりと輝き出するにはちょっと骨が折れ

るといった具合だった。

彼のように人為的な生活の複雑な事柄については根本的に何も知らない人間にとって、前の、もっと単純な世界から軍艦のより複雑で抜け目のない世界への突然の移動は、その気質にうぬぼれ、あるいは虚栄が少しでもあったとすれば、その人物をまごつかせることになっていたかもしれない。『ベリポテント号』の多種多様な人間が大勢集まったなかに、階級はどんなに低くても非凡な特質をもつ者が数人乗り組んでいた。それは、絶え間ない軍事教練や繰り返し戦闘に加わることで平均的な男でもある程度身につけることになる場合があるような態度をさらに目だって身につけた船員たちであった。

「ハンサム・セイラー」としてのビリー・バッドの七十四砲艦上での立場は、地方から連れてこられて、宮廷の貴婦人たちと競い合うことになった、田舎の美人の立場とやや似ていた。しかし、こういった境遇の変化に彼はほとんど気付かなかった。彼の何かが、ほかの者たちよりも厳しい顔つきをした水兵のうちの一、あるいは二人の男に曖昧な微笑みを引き起こしたことに彼はほとんど気付かなかったのである。後甲板にいる士官たちは水兵たちよりも聡明だったが、ビリーは、自分の容姿と振舞いがこれらの士官たちに独特の好印象を与えていたことにも気付いていなかった。彼が士官たちに好印象を与えたのも当然のことではあったのだが。彼の容姿は、生粋のサクソン人の血を引いていて、ノルマン人その他の人種が混じり合っていないように思えるイギリス人男性がもつ、最も見事な肉体の例に特有の容姿であって、あの古代ギリシャの彫刻家が、いくつかの作品で、力強い英雄、ヘラクレスに与えた、穏やかで善良な気質を示す心優しい表情をしていた。しかし、これもまた、もう一つの、身体のあるところに見られた特性で微妙に修整を加えられていた。小さくて形のよい耳、土踏まずの反り具合、口元から鼻にかけての曲線、オオハシのくちばしのようなオレンジがかった黄褐色に染まり固くなった手、ハリヤードとタールバケツを扱っていることを物語っている手でさえそうだったが、とりわけ、豊かな表情や、あらゆる思いがけない態度や動作に見られるあるもの、彼の母親がヴィーナスと美の三女神に極めて気に入られたことを思わせるあるものが、彼の今の境遇とは正反対の血筋を奇妙に指し示していた。このことについての神秘性は、ビリーが車地のと

ころで正式に入隊させられていたときに明るみに出たある事実によって、やや弱まった。担当の士官は——その士官というのは、たまたま小柄できびきびした紳士だったが——いろいろ質問するなかで、ビリーの生まれた場所を尋ねた。「すみません。私は知らないのです。」とビリーは答えた。

「自分が生まれた場所を知らないのか？おまえの父親はどんな人だったのだ？」

「神様のみがご存じです。」

率直で飾り気のないこれらの答えに心を打たれて、将校は次にこう尋ねた。「自分の幼少のころについて何か知っていることはないのか？」

「ありません。ただ、私が話に聞いたところでは、ある朝、ブリストルのある名家の玄関のノッカーにぶら下げられた、内側にきれいな絹を張ったバスケットの中で、見つかったそうです。」

「見つかったって？」と、士官は頭を後ろにそらせてこの新入の徴募兵を上から下まで眺めながらいった。「まあ、とてもすばらしい掘り出し物だったというわけだ。お前のような者がもっとたくさん見つければいいのだが。艦隊はお前のような人間を大いに必要としているのだ。」

そう、ビリー・バッドは捨て子だったのだ。おそらく私生児だったのであろう。しかも、明らかに身分卑しからぬ私生児だったようだ。サラブレッドの場合もそうだが、彼が高貴な血筋を引いていることは一目瞭然明だった。

その他の点についていえば、彼には抜け目のない才能や蛇のような狡猾さを示すものはほとんど、もしくは全然なかったが、かといってハトのごとくに柔和というわけでもなく、いかがわしい智慧の林檎をまだ進呈されたことのない健全な人間がもつ、型にはまらない廉直さに付随するような種類の知能、また、そういった程度の知能はもっていた。彼は無学で、読むことはできなかったが、歌うことはできた。そして、無学なナイチンゲールのように、ときには自分で歌を作った。

彼にはほとんど、あるいはまったくというべきかもしれないが、自己意識がないみたいであった。つまり、セントバーナード犬がもっていると考えるのも当然だとされる程度の自己意識しかないみたいであった。

いつも雨風とともに暮らしていて、陸地とっては、海岸地域、いやむし

ろ、水陸からなるこの地球で、自然の摂理にしたがってダンスホール、売春宿、そして酒場のためにとっておかれた場所、つまり、水夫たちによって「水夫の楽園」と呼ばれている場所といったほうがよいが、この場所以外はほとんど知らないので、ビリーの無邪気な性質は、世間体の良さとして知られているあの人工的なものと両立しないことがないわけではないたぐいの不道德な行いによってゆがめられないままの状態だった。とはいっても、「水夫の楽園」の常連である水夫たちは、不道德な行いをしないというのだろうか。いや、そういうわけではない。だが、陸上生活者の場合ほど、彼らのいわゆる不道德な行いが、心のひねくれた状態を感じさせることはない。彼らの不道德な行いは、ひねくれた心からというよりも、むしろ長期にわたる抑制を経たあとでの満ちあふれる生命力から発したと思えるもので、自然の法則にしたがってはばかることなく現われ出たものと思える。彼の生来の気質のうえに、それを助長するような彼の境遇の影響も手伝って、ビリーは、多く点において、高潔な野蛮人のようなものでしかなかった。おそらく、洗練された蛇が体をくねらながら彼の前に姿を現わす前のアダムがそうであったかもしれないように。

ここで少し申し上げたいことがある。こんなことをいうと、今日では一般に無視されている、「人類の墮落」という教義を裏付けることになるかもしれないが、ある種の俗化していない純粋な徳が、文明という外的なユニフォームを身に付けている人の際立った特質となっている場合には、よく調べてみると、これらの徳は、慣習やしきたりから派生したものではなく、むしろ、それらとは調和がとれておらず、あたかもカインの都市、そして都市化した人間より前の時代から特別に送られてきたかのように思えるということは、注目すべきである。そのような特質をもつ人物は、味覚が損なわれていない人にとって、ベリーのような、手を加えられていない味がするであろう。いっぽう、完全に文明化された人は、たとえまづまづの人であっても、同様の味覚をもつ人にとって、混合されたワインのようにいかがわしい味がするであろう。キャスパー・ハウザーのように、たまにこれらの原始的な特質を受け継ぎながら、我々の時代のどこかのキリスト国の首都を茫然として歩き回っているのを発見された人については、それがどんな人であれ、二千年近く

前の、善良なる詩人、マルティアリスの有名な呼びかけの言葉、場違いにも皇帝たちの時代のローマに出てきた善良な田舎者への呼びかけの言葉が今なお十分に当てはまる。

正直で貧しく、言葉も考えも誠実なファビアヌスよ
なにゆえにお前は都へやってきたのか？

わが「ハンサム・セイラー」は、これ以上のものはほかでは見つからないだろうような男性美の持ち主であったが、それでも、ホーソンの小品の一つに出てくる、頬にあざのある美しい女性のように、彼にもたった一つ具合の悪い点があった。その女性の場合のように目に見える汚点ではまったくなかったが、ときたま発声上の欠陥が見られたのである。波や風が立ち騒ぐとき、あるいは危険が迫っているときには、彼は船員として申し分のない働きをしたのだが、突然心の底から湧き起こる強い感情に突き動かされたときには、いつもはとりわけ音楽的で、まるで内面の調和を表現しているかのような彼の声は、身体器官の小休止を招き、実際、多少どもったり、または、もっとひどい状態になる傾向があった。まさにこの点において、ビリーは、第一番の邪魔者、エデンの園の嫉妬心の強いぶち壊し屋が、今なお、この地球という惑星に送りこまれたすべての人間に多少ながらも関係しているということの際立った例であった。あらゆる場合において、何らかの形で、悪魔は必ず自分の小さなカードを差し込むのである。彼もここで一役買っているのだということを我々に思い出させようとせんばかりに。

この「ハンサム・セイラー」のそういった欠陥を認めるということは、彼が月並な主人公として提示されていないだけでなく、彼が中心人物であるこの物語が決してロマンス物語などではないことの証左となるろう。

ビリー・バッドが『ベリポテント号』の乗り組み員として強制徴募されたとき、その船は地中海艦隊との合流の途上にあつた。合流するのにさほど時間はかからなかった。その艦隊の一戦艦として、七十四砲艦は作戦行動に加わった。もっとも、ときには、帆走能力が優れているために、フリゲート艦が不在のときには、偵察艦として単独の任務のために派遣されたり、また、

ときには、単なる偵察よりもっと長期にわたる任務のために派遣されたのだが。しかし、こういったことはこの話とはほとんど関係がない。実際のところ、この話は、ある特定の船の内側の生活とそこでの一人の水兵の人生の変転に限定されているからだ。

一七九八年の夏のことだった。その年の四月にポーツマス近くのスピットヘッドで暴動が起こった。さらに五月に、次の、なおいっそう大きな暴動がテムズ川河口のノアに停泊中の艦隊で起こった。後者は、「大暴動」という名で知られているが、「大」がついても誇張ではなかった。それは実際にイギリスにとって、フランス執政内閣の当時の数々の宣言と、征服し、転向を強いる軍隊よりももっと脅威を与える集団意思表示行為だった。大英帝国にとってのノアの暴動は、市全体に及ぶ放火の危険にさらされているロンドンにとっての消防隊のストライキのようなものであった。数年後、海軍の戦列全体に対して、いざというときにイギリスが何をイギリス人に期待するかを表明したネルソンの有名な文句がこのときに発せられたとしてもおかしくはなかったような重大時局であった。まさにこういったときに、自国の停泊地で錨を下ろしている三層甲板艦と七十四砲艦、それらはヨーロッパにおけるほとんど唯一の自由な保守的強国の右腕となる艦隊であったのだが、それらの檣頭に、何千という数の水兵たちが万歳を叫んで、連合を表わす十字を抹消したイギリス国旗を掲げたのである。その抹消は、定められた法と限定された自由の旗を、とめどのない無軌道な反乱を示す敵側の不吉な赤い流星へと変えるものであった。燃えさかるフランスからイギリス海峡を越えて飛んできた燃えかすによるかのように、艦隊でのさまざまな実際的な苦情の種から生まれたもっともな不平不満に火がついて、分別を失った騒動になったのであった。

その出来事は、ディブデン、彼は作詞家として当時のヨーロッパの危機に際してイギリス政府をかなり手助けしたのであるが、その彼の勢いのよい歌詞、とりわけイギリスの船乗りの愛国的な献身をたたえる一節、「そして、わが命といえ、それは国王のもの！」をしばらくの間皮肉に変えてしまった。

イギリスの壮大な海軍の歴史におけるこのようなエピソードを、この国の

海軍史の研究者たちは当然のことながら省略している。彼らのうちの一人、ウィリアム・ジェイムズは、「公平であるためには好き嫌いをいってはいけない」というのでなければ、喜んでそれを省くであろう、と正直に認めている。彼は省いてはいないのだが、それでも彼の記述は詳しいことにはほとんどまったく触れておらず、叙述というよりは単なる言及といった程度のものである。詳しい記述を図書館で見つけ出すことも容易ではない。いつの時代にも、アメリカを含めてどこの国家にでも降りかかってくる、さまざまな他の事件のように、「大暴動」というのは、国家としての誇りが、実際的な知恵という観点と結合して、むしろ歴史的背景へと次第に変化させてしまいたいと思わせるような性質のものだった。そのような事件を無視することはできないにしても、それらを歴史的に慎重に取り扱う方法はある。ある一人の立派な立場の人が、何か自分の家族について不都合な、もしくは悲惨な事柄を表に出すことを差し控えるならば、同じような状況におかれた国家が同様に控えめにしても非難はできないかもしれない。

政府と首謀者たちとの間で何度か交渉が行われ、いくつかの紛れもない悪弊については政府が譲歩したあとであったが、最初の暴動、すなわち、スピットヘッドでの暴動は、困難をともしないはしたが、鎮圧された。というよりは、しばらく間事態は平穏になった。けれどもノアにおいて、予期しなかった暴動が再び起きたのだが、この暴動はさらに大規模なもので、しかもそれに続いた何度かの交渉の場でも出された、認めることができないばかりか攻撃的で傲慢であると当局が考えたさまざまな要求によって際立つものだった。この予期せぬ暴動の再発は、かりに赤旗だけでは不十分であったとすれば、水兵たちを駆り立てていたものがどのような気持ちであったか示していた。しかし、最終的にはこの暴動は鎮圧された。おそらくそれが可能になったのは、海兵隊員の揺るぎない忠誠心と乗組員の一部の勢力をもつ者たちのあいだでの自発的な忠誠心の回復によってこそであったろう。

ある程度まで、ノアの暴動は、すぐに元に戻りはするが、生まれつき健全な肉体の調子を狂わせる伝染病の熱の発生に類似しているとみなされるかもしれない。

とにかく、何千人というこれらの暴徒のなかには、遠からずして、もっぱ

ら愛国心によってか、あるいはけんか好きな本能によってか、あるいはその両方によって駆り立てられて、ネルソン提督のためにナイル川で宝冠を、また、トラファルガーで海軍の栄誉中の栄誉を獲得するのを助けた水夫たちもいた。暴徒たちにとっては、それらの戦い、それもとくにトラファルガーの戦いは、全面的赦免の機会、それも華々しい機会であった。華やかな海軍の力量の発揮と、戦いにおける英雄的壮大さを構成するのにあずかるものについていえば、これらの戦い、とくにトラファルガーでの海戦は、人類史上比類のないものである。

4

この物を書くということにおいては、本筋に沿っていこうと人がどう決心しようとも、わき道のなかには容易に抵抗できない誘惑する力をもつものがある。ここで私は、本筋を離れてそういったわき道の一つに入っていくことにする。もし読者の皆さんが私につきあってくれるならば、私はうれしく思う。少なくともわれわれは、いたずらっぽくいわれる、罪を犯すことから得られる喜びを期待できる。なぜならば、この逸脱は文学上の一つの罪となるからだ。

中国からヨーロッパに火薬が初めて伝わったことですべての戦争において大変革が生じたのに匹敵するくらい、現代のさまざまな発明がついに海戦において変化をもたらしたといっても目新しい発言ということにはならないであろう。最初のヨーロッパの火器は不格好な発明品であったが、よく知られているように、隠れもしない正々堂々の一騎討ちですつくと立って剣を交えることのできないような臆病な職工にとってなら向いているかもしれない卑劣な道具だとして、少なからぬ騎士たちに嘲られた。しかし、陸上で、華々しさは失われたにせよ、騎士らしい勇敢さが騎士とともに無くなりはいしなかったのと同様に、現代、海戦におけるある種の誇示された勇敢さは、変化した環境のもとではそぐわないものとして時代遅れになってはいるけれども、海上でも、オーストリアのドン・ジョン、イタリアのドーリャ、オランダのヴァン・トロンプ、フランスのジャン・バール、また、たくさんの一連

の英国の提督たち、そして第二次対英戦争時の一八一二年のスティーヴン・ディケイターといったアメリカの優れた提督たちのような海軍の大物たちの高潔な気質は木造の艦船とともに廃れてはしまわなかったのである。

それにもかかわらず、もし、現在をその真価通りに認めながらも過去を不当におとしめることのない人にとって、ポーツマスにある打ち捨てられたような古い船体、ネルソン提督の『ヴィクトリー号』が、不朽の名声の朽ちゆく記念碑としてだけでなく、その眺めのよさによって和らげられてはいるにせよ、「モニター艦」と呼ばれるアメリカの甲鉄艦、そして、より強力なヨーロッパの甲鉄艦の船体に対する非難を表わすものとしてそこに浮かんでいるように見えたとしても、許されるであろう。そして、それは、止むを得ないこととはいえ、そのような甲鉄艦が古い戦艦の均整と雄大な輪郭に欠けているのでみっともないという理由だけではなく、他のいくつかの理由にもよるのであろう。

先程触れた詩的非難がまったくわからないわけでもないのだが、それでも新体制のために、それを受け流す気になるかもしれない人たちがおそらくいるであろう。もし必要とあれば、こういった気持ちは偶像破壊にまで発展するかもしれない。これらの軍事についての功利主義者たちは、たとえば「偉大な船乗り」ネルソンが倒れた場所を示している『ヴィクトリー号』の後甲板にはめ込まれている星形の銘板を見て誘発され、戦闘でネルソンが自分の飾り立てた姿を見せたのは不必要なだけでなく、軍人らしくない、いや、もっといえば、いくぶん無謀で慢心した感じを与えるという意味のことをいうかもしれない。さらに、彼らは次のように続けるかもしれない。トラファルガーの戦いでは、それは事実上、まさに死への挑戦であった。そして死が訪れたのだ、と。彼が虚勢を張らなかつたら、ことによると戦闘を切り抜けて、勝利をおさめた提督として生き残ったかもしれなかった。それゆえに、すぐさま彼の後を継いで指揮をとったカスバート・コリングウッド男爵によって自分が死に際に下した聡明な命令を却下される代わりに、勝敗がきまったとき、自分自身で、ダメージをこうむった艦隊に投錨させていたかもしれなかった。そうしておれば、戦いの嵐のあとに続いた自然の嵐での難破による嘆かわしい生命の損失を防げたかもしれなかったのに、と。

なるほど、その艦隊に投錨させることが諸般の事情を考慮して可能であったかどうかという、非常に議論の余地のありといえる点をわれわれが無視するならば、戦争についてのベンサム的功利主義者の上述の主張はもっともらしいと思えるかもしれない。しかし「～かもしれなかった」という仮定の説に基づいて論を進めるのは、沼地に何かを建てるようなものだ。そして、これは間違いないことだが、会戦というもっと重要な問題についての慎重さの点で、また、コペンハーゲンの海戦に際して危険な航路に浮標をつけ、それを精密に図示したように、会戦のことを案じてそれに備える点で、向こう見ずにも戦闘時に敵の前に自分の姿をさらしたこの人物ほど苦心し、用心深くことを運んだ司令官はほとんどいなかった。

怪我をせぬように、命を落とさぬようにと慎重に振舞うことは、利己的な理由とはまったく別の理由で行われたときでさえ、決して軍人の特別な美德とはならない。だが一方、栄光を極端に大切に思うことは、誠実な義務感という、強烈さの点では劣る衝動をかき立てるので、一番重要な美德なのである。もし、ウェリントンという名が、より地味なネルソンの名ほど血を沸き立たせる勇ましい響きをもたないとすれば、その理由は上述のことからおそらく推測していただけるであろう。アルフレッド・テニスンは、ワーテルローの勝利者、ウェリントンについての追悼賦のなかで、ネルソンに対して「世界始まって以来の最も偉大な船乗り」と呼びかけているが、ウェリントンのことを歴史上最も偉大な軍人とあえて呼ぶことはしていない。

トラファルガーで、まさに闘いを始めようとする瀬戸際に臨んで、ネルソンは机に座り短い遺言を書いた。もし、すべての勝利のなかで最もすばらしい勝利が彼の栄光ある死によって最後飾られることを予感していて、一種の聖職者的動機のようなものによって自分の輝ける偉業を示す宝石をちりばめた勲章を身に付けたことが、すなわち、もし、このようにして祭壇と供犠のために身を飾ったことが本当に無駄な虚飾であったならば、それなら、すばらしい叙事詩や劇におけるもっと英雄的な詩行の一つひとつは、気取った言葉であり大言壮語であるということになる。というのは、そのような詩行において、詩人は、ネルソンのような人が、機会を与えられれば、実際に行動に移す高揚した感情を詩のなかで表わしているにすぎないからである。

5

さよう、ノアでの暴動は鎮圧された。だが、すべての不満の原因が除去されたわけではなかった。たとえば、請負業者が、粗悪な布地や傷んだ、あるいは量目をごまかした糧食を配給するといったような、あらゆるところの請負業者特有の商売上の手口をもう許されなくなったとしても、それでもなお一つ注目すべきこととして、強制徴募は以前と同様に続いていた。何世紀ものあいだ慣習によって是認され、マンスフィールド卿の時代に至ってもまだ大法官によって法的に認可されており、艦隊に人を乗り込ませるあのやり方、つまり強制徴募は、今では中止されたような形になってはいるが、正式に廃止されたわけではない。当時それを廃止するのは実際的ではなかった。もし廃止しておれば、絶対必要な艦隊をだめにしてしまっていたであろう。その艦隊というのは百パーセント帆で走る艦隊で、蒸気機関はなく、その無数の帆と何千もの大砲、つまり、あらゆるものが人間の筋肉でもって動かされていた艦隊であり、それは、今すでにある、あるいは動乱のヨーロッパ大陸からやがてやってくるはずの不慮の事件に対して全ての等級の船を増やしていたために、人員の要求については、いっそう飽くことを知らぬという状態にあった。

不満が二つの暴動の前兆であった。そしてそれは、多かれ少かれ、まだ解消されずに潜んでいた。それゆえに、散發的なものにしる、全体的なものにしる、なんらかの紛争の再発を懸念するのは道理にかなったことであった。そのような懸念の一つの例を挙げよう。この話と同じ年に、そのときは海軍少尉ホレイショ卿と呼ばれる立場だったのだが、スペイン沖で艦隊と行動をともにしていたネルソンが、自分の三角旗を『キャプテン号』から『テセウス号』に移すように司令長官に指図された。それは次のような事情があったからである。『テセウス号』は、英国を出発して新たな任地に着いたばかりだったのだが、故国では「大暴動」に荷担していたので、水兵たちの気分からみて暴動の危険が懸念されていた。そして、ネルソンのような士官は、実際水兵たちを怯えさせて卑劣に屈服させるのではなく、ただそこに居ること

で、そして彼の英雄的な人格の力で、彼自身のものほど熱烈ではないにせよ、誠実さにおいては劣らぬ忠誠心を水夫たちに取り戻させる士官であると思われていた。

そういうわけで、しばらくのあいだ、後甲板の上官のあいだで不安が存在していた軍艦は、一隻にとどまらなかった。海上にあつては、暴動の再発を予防するための警戒が強められた。突如としていつ敵と交戦することになるかもしれなかった。いざ交戦となったとき、砲郭での任務についていた大尉たちは、場合によっては、大砲を操作している水兵たちの後ろに抜き身の剣を手にして立つことを自分たちの責務だと思っていた。

6

しかし、ビリーが今ハンモックを吊している七十四砲艦の上では、普通の人が観察する限り、水兵たちの態度には「大暴動」が最近の出来事だと思わせるものはほとんど何もなかったし、将校たちのようすにも、そう思わせるものは何も明らかには見てとれなかった。軍艦の士官たちは、その態度と行為一般において自然に司令官の色合いに染まるものである。司令官が、当然そうであるべきように、人格的に彼らより優っておればのことではあるが。

称号を全部並べたてれば、エドワード・フェアファックス・ヴィア艦長閣下となる人物は、四十歳かそこらの独り者で、高名な船員が数多くいた時代においてでさえも、傑出した船乗りであった。ひときわ位の高い貴族たちと縁戚関係にあったのだけれども、彼の昇進はひとえにその境遇と関係する有力者たちのおかげというものでもなかった。彼は軍務の経験は豊富で、さまざまな交戦に参加してきており、自分の部下の水兵たちの幸福をいつも心に留めている将校として常にその任務を果たしていたが、かといって軍紀違反を大目に見ることは決してなかった。彼は自分の職業にかかわる具体的な知識は完璧に身に付けており、決して分別を失うところまでには至らなかったが、向こう見ず寸前の大胆さをもっていた。ロドニー提督がド・グラススに対してこの上ない勝利をおさめた際に、ヴィアは彼の副官として西インド諸島海域で勇敢さを発揮したが、彼はそのために海軍大佐に任命されたのだっ

た。

陸^{おか}では、民間人の服装をしておれば、ほとんど誰も彼を船乗りだとは思わなかっただろう。それは、とりわけ彼が専門外の話をするときに決して航海用語で自分の話を飾ったりしなかったし、振舞いにおいても厳粛で、単なるユーモアにはほとんど興味を示さなかったからであった。こういった特性をもつ人物にふさわしく、航海中に、彼の艦長としての行動がまったく必要とされていなかったとき、彼は誰よりも感情を表に出さない人間だった。陸^{おか}の人間が誰か乗り合わせていて、背丈で目立つこともなく、はっきりした記章も身につけていないこの紳士が艦長室から無蓋の甲板に現われるのを見、そして、士官たちが無言で敬意を表して風下に下っていくのに気がつけば、彼は国王陛下の客である、つまり、国王陛下の軍艦に乗っている民間人で、ある重要なポストに就くべく任地に向う途中の、きわめて立派で用心深い外交使節であるとひょっとして思ったかもしれなかった。だが、実際には、この控えめな物腰は、ときどき意志の固い性質に伴う、ある種の気取らない、男らしい謙遜——顕著な行動が必要とされないときにいつも現われ、どんな階層の男において見られるときでも本質的に貴族的な美德をそれとなく示している謙遜——に起因していたかもしれぬ。この世で見られるさまざまな部門の比較的英雄的な活動に従事している何人かの他の人たちのように、ヴィア艦長は、いざというときには申し分なく実際的な人物だったが、ある種のぼんやりとした気分をときどきさらけ出したものだった。片手で索具をつかみながら、後甲板の風上側に一人で立ち、ぼんやりと空虚な海のほうを眺めていたことがあった。そういったときに、何かささいなことについて報告を受け、彼の思考の流れが中断されると、多少かっとなる様子を見せたものだった。直ちにそれを抑えはしたのだが。

海軍では、彼は「星のごときヴィア」という呼び名で一般に知られていた。彼がいかなるすぐれた特質をもっていたにせよ、光彩を放つようなものは持っていなかったのに、そのような称号が彼についたのには、次のような事情があったのだ。彼には、デントン卿という、くったくの無い、お気に入りの親戚がいたのだが、彼が西インド諸島の航海からイギリスへ帰ってきたときに真っ先に出迎え祝福した人物がこのデントン卿だった。デントン卿はちょ

うどその前日、アンドルー・マーヴェルの詩集のページをめくっていて、偶然、といってもそれが初めてではなかったのだが、「アップルトン邸」と題した詩をふと見かけた。それは、十七世紀のドイツとの戦争における英雄であった彼らの共通の祖先がもっていた田舎の屋敷のうちの一つの名前であった。その詩のなかに、次のような詩行が見られる。

最初からこうなるはずのもの、
フェアファックスと星のごときヴィアの
厳しいしつけの元で、
家庭の楽園の中で大切に育てられて。

そういうわけで、自分のいどこにあたるヴィアが、ロドニー提督が大勝利をおさめた海戦で非常に勇ましい働きを演じて戻ってきたばかりのときに、デントン卿は彼を抱きしめて、自分の一族から出たその船乗りに対する親族として当然の誇らしい気持でいっぱいになりながら、いかにもうれしそうに叫んだ。「おめでとう、エド。おめでとう、私の星のごときヴィアよ。」これが広まって、身内が話すときには、その新しい敬称が、彼より年長のもう一人のヴィア、それは遠い親戚で、海軍において同じ階級の将校だった男だが、このもう一人のヴィアと『ベリポテント号』の艦長とを区別するのを容易にするのに役立ったので、そのままずっと名字につけられることとなったのだ。

7

『ベリポテント号』の司令官がまもなく始まるいくつかの場面で演じる役割から考えて、前の章で輪郭を描いておいた彼の素描を補完しておくのが妥当であろう。

海軍士官としてのさまざまな特質は別として、ヴィア艦長は例外的な人物であった。多くのイギリスの有名な船乗りとは違って、長期にわたって困難な軍務に際立って献身してきたことが一人の人間を丸ごと取り込み、苦々しい思いを抱かせてしまうという結果にはならなかった。彼は、知的なものな

ら何でも非常に好んでいた。彼は書物を愛しており、航海に出るときにはいつも、冊数は少ないが最良の本だけで構成された、新しく揃えたコレクションを携えたのだった。戦時の巡航のあいだでさえ、たった一人で過ごす余暇がときどき指揮官を訪れることがあり、人によってはそれはとても退屈なものなのだが、ヴィア艦長にとっては決してそうではなかった。伝えられるものより伝える手段に対してもっと関心を払うといった文学的な趣味は少しももっておらず、彼が好んだのは、世の中で活動的で権威ある地位についている、より優れた種類のあらゆるまじめな精神の持ち主が自然と好むような書物であった。つまり、どの時代のものであれ、実在の人物たちと実際に起こったさまざまな事件を扱った本、歴史書、伝記、そしてもったいぶった言葉づかいやしきたりから解放され、純粹で良識のある精神で現実を哲学的に思索するモンテーニュのような非因習的作家の書物である。こういった種類の書物を読むことで、彼は自分自身のいくつかの比較的控えめな信念の裏付けを見い出したが、こういった裏付けは、社交上の会話で得ようとしても得られなかったので、たいていの基本的な問題に関して、知能が損なわれずにいる限り、本質的に変わらないまま自分の内に残るだろうと彼が予感したような強い確信がいくつか彼の内に樹立されなければならなかった。彼がたまたま生まれ合わせた騒がしい時代を考えると、このことは彼にとって良いことだった。彼のゆるぎない確信は、社会的、政治的、その他もろもろの新しい考えの押し寄せる波に対する堤防のようなものだった。その波は、その時代の多くの人たち、生まれつき彼の精神に劣らぬ精神をもった人たちを激流のように押し流したのだった。生まれの点では彼が属していた貴族階級の他のメンバーたちは、革新者たちの理論が特権階級にとって有害であるというのが主な理由で、彼らに対して激怒していたのだが、ヴィア艦長は、そういった理論が永続的な諸制度の内に具体化され得ないように思えたからだけではなく、世界の平和と人類の真の幸福に対立すると思えたからこそ、私心なく反対したのであった。

ときどき彼が職務の必要上付き合っていた同じ階級の何人かの将校は、彼ほどには知識を備えた、かつまじめな精神をもっていなかったが、彼らは、ヴィア艦長のことを、人付き合いの悪い、冷たい、読書好きな紳士だと見て

いた。彼らが集まっている場所からヴィア艦長がたまたま離れたときにはいつもそうだったが、彼らのうちの一人が、別の一人に次のようなことをいったものだった。「ヴィアは立派な奴だよ。星のようなヴィアは。官報にいろいろ書いてあるが、ホレイショー卿（彼はやがて男爵の位を得てネルソン卿と呼ばれるようになるのだが）だって、本当のところ、船乗りあるいは軍人としてヴィアよりも上だなんてとてもいえないぜ。だけど、ここだけの話、ヴィアには奇妙に学者ぶった面があると思わないか？そう、海軍で使う一巻きの綱の中に混じっている王様用のより糸みたいじゃないか？」

このような類いの内密の批評にも、ある明らかな根拠があった。すなわち、ヴィア艦長の会話はけっしてふざけ半分のくだけたものへと墮することがなかっただけでなく、世間を騒がせている当時の人物や出来事について何かを説明するとき、現代の例から引用するのと同じくらい、古代ギリシャ・ローマ時代の歴史的な人物や出来事を引用する傾向があったからだ。彼のぶっきらぼうな仲間たち、読むものといえばほとんど航海日誌だけといった男たちに対して、そのような古い時代への言及は、どんなにそれが適切であったにせよ、まったくなじみのないものだったが、彼はそんな状況を気に留めるようすもなかった。いや、そういった点について相手を思いやることは、ヴィア艦長のような性質の人たちには容易ではない。彼らの誠実さは率直さを彼らに命ずる。いつ国境を飛び越えようと一向に気にしない渡り鳥と同じように、その率直さは、ときにははるかかなたへと達するのだ。

8

ヴィア艦長のスタッフを形成していた大尉たちやその他の士官たちについて、ここで詳しく述べる必要はないし、准士官のだけ一人として言及する必要はない。だが、下士官の一人はこの物語と大いに関係があるので、ただちに紹介するほうがよいかもしれない。彼の描写を私は試みはするが、決して正確には表現できないであろう。この下士官というのはジョン・クラガートという男で、前任衛兵伍長 (the master at arms) であった。だが、元は「武器の達人」という意味をもつこの海軍における肩書きは、陸上生活者に

はややあいまいに思えるかもしれない。元来、その下士官の職務が、武器、つまり剣あるいは短剣の使用法を水兵たちに教えることであつたということは間違いない。だが、ずいぶん前に、銃砲製造技術の進歩のために、白兵戦は以前ほど頻繁ではなくなり、鋼に対して硫黄と硝石のほうが優位を占めるようになったので、その職務は終わりを告げた。大型軍艦の前任衛兵伍長は、混雑している下部砲列甲板の規律を保つ任務をおもに命じられた、警察本部長のようなものになったのだ。

クラガートは三十五歳くらいの男で、ひよろ長かつたが、全体としては決して見栄えのしない容姿の持ち主ではなかつた。彼の手は、小さくて格好のよいもので、厳しい苦役に慣れている手というわけではなかつたろう。その顔は注目に値するもので、顎を除くと、その顔の造作のすべては、古代ギリシャの円形浮き彫りに見られるもののように端正だつた。しかし、彼の顎は、テカムセの顎のようにひげが無く、その形は、聖職者特有のゆっくりとした話しぶりで証言した、チャールズ二世時代の歴史的人物であり、「カトリック教徒陰謀事件」にかかわる詐欺師であつたタイタス・オーツ師の版画を思い出させるようなもので、やや奇妙に幅が広がって突き出ている。相手を睨むような目つきでちらっと見ることができた点は、クラガートが自分の任務を遂行するうえで役立つた。彼の^{ひたい}額は、骨相学的にいつて、平均以上の知的能力を思わせる類いのものであつた。その額の一部に絹のような黒い巻毛がかぶさり、その下の、古くて時を経て変色した大理石の色合いと同類の、琥珀色がかつた青白さを引き立てていた。彼の顔色は、船員たちの顔の赤色、もしくは深い赤褐色と際立つた対照をなしていたが、その青白さは、ある程度まで彼が自分の職務上太陽の光から隔離されていたせいでもあつた。彼のこの顔色は必ずしも不快な気持ちを起こさせるものではなかつたが、それにもかかわらず、体質および血液になにか欠陥か異常があることを示唆しているようだつた。しかし、彼の全体的な外観や態度は、彼の海軍での職務と不釣り合いな教養と経歴をよく示していたので、活発に職務に従事していないときは、あれこれ理由があつてその身分を隠している、社会的にも道徳的にも優れた特質をもつた男のように見えた。彼の以前の生活については何も知られていなかつた。彼は英国人だつたのかもしれない。だが、ことによると

生まれつきではなく、幼い子供のときの帰化によってそうなったことを思わせるようななまりが少しばかり彼の話し方に潜んでいた。砲列甲板と水夫部屋の何人かの白髪まじりのうわさ好きな水夫仲間の間では、前任衛兵伍長は、ある詐欺事件について王座裁判所で罪状認否を問われ、その件を示談ですませようとして国王陛下の海軍に志願した詐欺師であった、という密かなうわさが広まった。もちろんのこと、だれもこのうわさを実証できなかったからといって、内密にそのうわさが広まることは少しも防げられはしなかった。士官の地位より下の人物ならほとんど誰に関してであれ、砲列甲板でいったん始められたそんなうわさは、この物語に割り当てられた時代には、水兵たちのうちのタールで汚れた年寄りで、知ったかぶりをする人たちにとって、まったく信用性に欠けているものとは思えなかつただろう。そして、実際、航海の経験ももたぬまま相当の歳になってから海軍に入ったので、最初は最も低い階級に必然的に配属された、クラガートほどいろいろの教養、才芸を身に付けた男、しかも、陸での自分の以前の人生については決して何もいわなかつた男——こういったことがあったので、彼の本当の前歴については正確な情報が不足していたために、はっきりしない部分が残し、妬み深い者たちが好意的でない推測をすることとなったのである。

しかし、水夫たちが折半直のときにする彼についてのうわさ話は、次のような事実があったので、なんとなくもっともらしく感じられたのである。つまり、ここしばらくの間、船の乗組み定員を保持するという点で、英国海軍にはきれいごとをいっている余裕はほとんどなかつたので、いくつかの水兵強制徴募隊が、海上でも陸上でも広範囲にわたって活動していたことが広く知れわたっていただけでなく、もう一つの問題、つまり、健康で丈夫な容疑者や一般に疑わしい人物はだれでも、ロンドン警察が自由に捕まえて、そくぎに海軍工廠か艦隊に送ってよいとされていたことは、ほとんど、あるいは、まったくといってよいほど、秘密でもなんでもなかつたのである。さらに、自発的な入隊の場合でも、その動機は、愛国的な衝動に駆られたのでもなく、また海での暮らしや戦争での冒険を少し経験してみたいという、気ままな欲求に駆られたのでもない例がいくつかあった。相手かまわずセックスをしたために、責任を取れなくなった男たちとともに、小額の借金が返せなくなっ

た男たちは、海軍に、都合のよい安全な避難所を見い出した。なぜ安全だったかといえば、一度入隊して軍艦に乗り込むと、彼らは、教会の祭壇の暗がりに隠れた中世の罪人のように、庇護されていたからである。こういった、是認されてはいたが不正なやり方は、いくつかの明らかな理由のために政府は当時公にしようとはせず、そのために、また、人類で一番発言力のない階級に影響を及ぼすものであったために、ほとんど忘れ去られてしまっているが、こういった不正なやり方が、ある事柄をもっともらしく思わせるのである。私はその事柄が真実だとは主張しないし、したがって、それを述べるのにいささか躊躇するのではあるが。それについては、何の本かは思い出せないのだが、活字になったのを見たことは覚えている。だが、それと同じことは、今では四十年以上も前のことになるが、私がグリニッジ病院のテラスでとても興味深い対話をした、三角帽をかぶった年寄りの年金生活者からじきじきに私に伝えられたのである。彼はボルチモア出身の黒人で、トラファルガーの戦役に従軍した水夫であった。その同じことというのは、次のような趣旨の話であった。人手の足りない軍艦がどうしても迅速に出航しなければならなかった場合、不足した人数は、欠員を補充する他の方法がないので、刑務所から直接選り抜いた徴募兵で補われたものだった。前に述べたような理由で、今日、この申し立てを証明するのもそれに対する反証を挙げるのも、おそらく容易なことではないだろう。だが、本当のことだったとすると、ハルピユイアの群れのように、打ち壊されたバステューユ監獄の音とほこりのなかから叫び声をあげて現われた一連の戦争に当時直面させられていたイギリスの苦境をそれはなんとよく表わしていたことだろう。あの時代は、あとになって回想し、ただそれについて読むだけの私たちにとって、ある程度はつきりとしているように見える。しかし、わたしたち白髪まじりの者たちの祖父たちにとって、といっても、その中の比較的思慮深い人たちにとってのことだが、あの時代の精神は、神秘的で巨大であり、相手をその影で覆う脅威、カモエンスの「岬の亡霊」のような外観を示した。アメリカでさえ、懸念せずにはすむというわけではなかった。ナポレオンによる前例のない数々の征服が頂点に達したときに、バンカー・ヒルで戦った経験のあるアメリカ人たちで、大西洋が、革命の混乱から現われたこの桁外れの成り上がり者の究

極の企みに対する防壁にならない日がくるかもしれないということを予期した者もいた。そのナポレオンは、当時、ヨハネの黙示録に前もって表わされた予言を実行している最中のように思われたのである。

だが、軍艦でクラガートの地位についている者はだれであれ、水兵たちの人気を得ることは望むべくもなかったのだ。彼に関する砲列甲板でのうわさは、それほど信用できるものではなかった。そのうえ、相手がだれであれ、恨みをもっている人、また、いかなる理由であれ、あるいは理由もないまま、嫌っている人に対して悪口をいう際には、水兵たちは陸上生活者とともによく似ている。誇張したり、作り事を交えたりする傾向がみられるのだ。

天文学者が、初めて空に現われ観察できるようになる前の彗星の動きをまったく知らないように、その前任衛兵伍長が兵役に入る前の経歴については、『ベリポテント号』の船乗りたちは実際には何も知らなかった。うわさ好きな水夫たちの意見を紹介したのは、人間の悪意といえ、どうしても一番狭く考えてしまい、次元の低い悪漢ども、たとえば夜の見張りのときに、揺れるハンモックの間で盗みを働く者、または、悪質な仕事斡旋業者たちや、波止場詐欺師たちのことしか考えない、無知で教養のない者たちに、前任衛兵伍長が自分の道徳性についてどのような印象を与えたかを示そうとしたからにすぎない。

しかし、すでに簡単に触れたように、海軍に入ったとき、クラガートはまだ駆け出しで、軍艦の乗組員のなかで一番下の小隊に配属され、つまらぬ仕事を甘受していたのだがそこに長くは留まらなかったというのは、うわさ話ではなく事実であった。彼がたちまち発揮した優れた才能、体質的に酒類を受け付けないこと、上官たちにうまく取り入ってうやうやしく服従すること、さらに、ある特別な機会に明らかにされた、何かを探り出す特異な能力——こういったもろもろのこともあったが、彼のある種の厳格な愛国心が決め手となって、彼は突然前任衛兵伍長へと昇進したのである。

その船のいわゆる衛兵伍長たちは、この海の警察本部長といってもよい人間の直属の部下であり、しかも彼のいいなりになる部下であった。彼らは、陸上での仕事のいくつかの部門で見られるように、自分の心中の意志総体に反してまでも従順であろうとしたのだった。前任衛兵伍長は、その地位のお

かげで、内密に影響力を及ぼす、一点に集まるさまざまな糸を組織の長として支配できたが、これらの糸は、彼の下っ端を通じて抜け目なく操ったときには、それ以上にひどいことにはならなかったにせよ、平水夫のうちの誰であれ、原因不明の不快な気持ちを覚えさせることを可能にした。

9

前檣楼での生活はビリー・バッドによく合っていた。もっと上部の帆桁の上で実際に仕事に従事していないときには、若さと活動性を買われて檣楼員に選出された水夫たちは、一つの空中クラブを形成し、巻上げられてクッションのようになった小さい補助帆にくつろいでもたれかかり、怠け者の神々のように長々とむだ話をしながら、しばしば、下の甲板のにぎやかな世界で起こっていることを面白がって見た。だから、ビリーのような気質の若者が、そのような仲間のなかですっかり満足していたとしても不思議はなかった。ビリーは、誰も怒らせるようなことはしなかったし、呼ばれるといつでも機敏に応じた。商船での勤務のときもそうだった。だが、彼が任務を果すうえであまりの几帳面さを見せたので、仲間の檣楼員たちは、ときどきこのことで、彼を悪気なしに笑ったものだった。ビリーがこのようにとても機敏に反応したのはにはある原因があった。すなわち、彼が強制徴募された次の日に起こったのだが、彼が初めて目撃した正式な舷門処罰の印象のせいだった。舷門処罰を受けたのは、船が方向転換しているときに自分の持ち場を離れていた一人の小柄な男で、若い新参者の後部甲板員だった。彼の職務怠慢のせいで、方向転換の操作にかなり重大な支障が起き、即座に機敏に錨を降ろしてしっかりと停止することが必要となったのだ。罪人の裸の背中が鞭で打たれ、格子状に真っ赤なみみずばれができるのを見て、また、もっとひどいことに、釈放された男が、処刑執行人がさっと投げ掛けた毛織のシャツをはおったままその場から急いで去り、群衆のなかに姿を隠したときに顔に浮かべたものすごい表情を見て、ビリーはぞっとしたのだ。決して職務怠慢のために自分自身がこんな処罰を受けなければならなくなるようなことのないように、いや、何らかの作為、不作為によって口頭での叱責を受けたりする

ことさえないようにしようと決心したのであった。だからこそ、たまに、自分の袋の積み方がおかしかったり、ハンモックに具合の悪いところがあったりで、ごたごたが起き始めたときの彼の驚きと懸念はいかばかりだったろうか。そういった事柄は、下層甲板の衛兵伍長たちの監視下にあったが、そのために、彼はそのなかの一人から漠然とした脅し文句をいわれたのである。

万事につけ非常に注意深かったのに、どうしてこんなことになったのか？ 彼にはそれが理解できなかつたし、ただ悩まされたところの話ではなかつた。彼が仲間の若い檣楼員たちにそのことについてを話すと、彼らは、まさか、とって陽気に受け流すか、もしくは、彼が包み隠すことなく示した不安な気持ちを何かこっけいなもののように考えた。「おまえの袋なんだろう、ビリー？ じゃあ中に入って、縫い合わせてしまえよ。そうすりゃ、誰かがそれをいじくったら、間違いなくわかるぜ。」と仲間の一人はいった。

ところで、ある古参兵が『ペリポテント号』に乗り組んでいたが、彼は、歳のせいで、より活発な仕事にはそろそろ向かなくなつたと判断されたため、最近、当直時間の間、大檣員としての任務を割り当てられ、甲板から少し上の位置にある、大きな丸い柱の周囲に固定された厚板に巻き付けられた索具一式を監視していた。暇なときに、ビリーは彼とちょっとした知り合いになっていた。そして今、ビリーは、悩んでいたのも、ふと、賢明な助言を求めるとは彼がふさわしいかもしれないと思った。彼は、兵役につき長い間英国式の生活をしてきたデンマーク人で、デンマーク人の古い呼称を用いて「ダンスカー」と呼ばれていた。口数は少ないが、しわは数多くあり、また、名誉の傷跡もいくつかもっていた。時を経て変色し、また、雨風によつても変色した、彼の古い羊皮紙のような色のしわくちゃの顔には、作動中に銃の火薬筒が偶然爆発したためにできた青いしみがあちこちに散らばつてついていた。

彼は、戦艦『アガメムノン号』に乗っていた水兵だった。この物語に先立つこと約二年前、ネルソンが、海軍史上不滅であるその船で、いまだ大佐であったころ、彼の部下として軍務についていた。艦装を解かれ、肋材がむき出しになるまで一部解体されたその船は、ヘイドンの銅版画で壮大な骨組みを見せている。『アガメムノン号』の斬り込み隊の一員として、このデンマ

ーク人は片方のこめかみから頬に沿って斜めの切り傷を負った。それは、彼の浅黒い顔に斜めに注がれる、一筋の夜明けの光のように、長くて淡い色の傷跡を残した。彼の青いしみが散らばってついた顔の色だけでなく、その傷跡と、その傷のいわれのせいで、そのデンマーク人は、『ベリポテント号』の乗組員の間で、「煙の中を斬り込め」という名で通っていた。

さて、この古参兵の小さな、イタチのような目が偶然にビリー・バッドに初めてとまったとき、ぞっとさせるようなふうに心が浮かれたため、彼の古いしわが、いっせいにこっけいな動きを見せた。それは、彼が風変わりな、感傷を超えた古い知恵をもっていて、それは原始的な性質の知恵なのだが、軍艦の環境と対照をなす奇妙に不釣り合いなものを何か「ハンサム・セイラー」のなかに見たからなのか、あるいは見たと思ったからなのだろうか。しかし、ときどきこっそりとその水兵を注意深く観察したあと、老いた予言者、マーリンのような彼のいかがわしい浮かれた気持ちは修正を加えられた。というのも、今では、二人が出会うと、そういった気持ちのせいで彼の顔にからかうような表情が浮かんだが、それはほんの束の間のことで、ときには思索的な問いかけの表情がそれにとって代わった。それは、人を捕えるわながいくつもあり、しかも、これらのわなのさまざまな微妙な点に対しては、経験も手際の上さもともなわず、身を守るための醜さもともなわない単なる勇気がほとんど役に立たない世の中、また、人間としてこのうえなく無邪気であるからといって、善悪についての緊急の問題が起きると、それが必ずしも思慮分別を活発に働かせたり、あるいは、意思を啓発するわけでもない世の中に投げ出されたら、あのような人に最後には何が起きるのか、と尋ねているような表情であった。

それはともかく、彼らしくあまり自分の気持ちを表に表わさなかったが、このデンマーク人はかなりビリーを好きになっていた。それも、ビリーのような人物にある種の哲学的興味をもったという理由からだけでもなかった。もう一つ別の原因があった。ときどき熊の振舞いに近いと思われた、この老人の風変わりな態度のせいで、若い連中は寄り付かなかったが、ビリーはひるむことなく、彼を老練な英雄的な船乗りとしてあがめていたので、自分から彼に近づこうとし、『アガメムノン号』に乗っていた老水兵のそばを通る

ときにはいつでも彼に挨拶をしたが、その挨拶には、どんなにつむじ曲がりであっても、あるいは、この世でどんな位置にしようとも、老人に対してたいていは効き目をもつような敬意がはっきりこめられていたのである。

この大橋員は、真顔で冗談をいう気質、あるいは、それに近いものをもっていた。ビリーの若さと筋骨たくましい体格に対する気紛れで家長ぶった皮肉なのか、それとも別のもっと秘められた理由からだったのか、彼は最初からビリーを呼ぶのにビリー・バッドの代わりに「ベイビー・バッド」という呼称を用いた。わが前橋員は結局船内ではこの呼称で知られるようになったのだが、最初にそれを使い始めたのは、実際のところ、このデンマーク人だったのだ。

さて、例の謎めいたちょっとした問題を抱えて、このしわだらけの男を探していたビリーは、折半直の非番で、上部砲列甲板の弾薬箱の一つに座って、みんなより威張ったようすでそこをそぞろ歩いている連中のうちの何人かをいくらか皮肉な目つきで時々観察しながら、一人で考え込んでいる彼を見つけた。その一部始終がどうして起きたのか、再び不思議に思いながら、ビリーは自分の悩みを詳しく話した。その老練な予言者は、ビリーが話すにつれてしわを奇妙な具合にぴくぴく動かし、小さい、イタチのような目をどういうわけかはわからぬが小光りさせながら、注意深く聞いた。話し終えて、わが前橋員は、「さあ、ダンスカーさん、あなたがこのことについてどう思うか、教えてください。」といて頼んだ。

老人は、防水帽のひさしをぐいと押し上げ、例の斜めに走る長い傷跡の、薄くなった髪の毛の生え際のあたりをゆっくりと撫でながら、「ベイビー・バッドよ、ジェミー・レッグズがおまえに反感をもっているんだ。」と言葉少なにいった。（ジェミー・レッグズというのは、「がにまた」という意味だが、あの前任衛兵伍長を指す。）

「ジェミー・レッグズが！」と、ビリーは青空のような色の目を丸くしながら叫んだ。

「どうして？だって、あの人はぼくのことを『かわいくて気持ちのいい若者』と呼んでいるってみんないってますよ。」

「奴がそう呼んでいるって？」その白髪混じりの男はにっこり笑った。そ

れから次のようにいった。「そうだな、ベイビーよ、ジェミー・レッグズは甘い声をもっているからな。」

「いや、いつもというわけじゃないですよ。でも、ぼくに対してはそうなんです。あの人のそばを通り過ぎるとき、ほとんどいつもぼくに愛想のいい言葉を掛けてくれるんです。」

「だから、それは、奴がおまえに反感をもっているからなんだよ、ベイビー・バッド。」

いい方もそうだったが、そのような内容を繰り返されても未熟者には理解できず、彼が説明を求めた謎めいた事象とほとんど同じくらいビリーを混乱させる結果となった。彼は、もっと満足のいくような、わかりやすい説明を引き出そうとした。しかし、その年老いた海のケイロンは、彼の若きアキレウスに、さしあたっては十分教えたとおそらく考えたのであろう、唇をすぼめ、ありったけのしわを寄せると、それ以上何もいおうとはしなかった。

長い年月と、終生上官たちに従属させられてきた比較的利口な男たちに降りかかるさまざまな経験、こういったことすべてが、このデンマーク人のおもな特徴である、筋金入りの、用心深い、皮肉な性格を育てあげていたのである。

10

次の日に、ある一つの出来事が起き、そのために、彼が相談した問題に対して例のデンマーク人が下した不思議な判断に関するビリー・バッドの懐疑的な気持ちがますます強くなった。正午どき、船は順風を受けて、横揺れしながら針路に沿って進んでいた。ビリーは下の甲板で昼食中で、会食仲間と冗談話をしていたが、船が突然傾いたために、磨き上げられたばかりの甲板の上に自分のスープなべの中味をたまたま全部こぼしてしまった。前任衛兵伍長のクラガートが彼の職務につきものの藤製のむちを片手にもち、砲台の横を偶然通りかかっていたのだが、その砲台の狭いすき間に会食場があったので、脂っこい液体がちょうど彼の行く手を横切って流れた。状況が状況であり、それは別に気に留めるべきことではなかったので、彼はその流れたス

ープをまたぐと、そのまま何もいわずに歩を進めたが、そのとき、スープをこぼしたのが誰だったのか、彼はたまたま気付いた。彼の顔色が変わった。立ち止まって、かっとなってその水兵に何か叫びかけようとしたが、自分の気持ちを抑え、そして、流れているスープを指差しながら彼の藤製のむちで背後から水兵をふざけるように軽く叩くと、ときどき聞かれる彼特有の低い、耳に快い声でいった。「おい！みごとなもんだな。しかも、みごとにやったのが、これまたハンサムな男ときたものだ。」そういつて彼は進んで行った。どうともとれるようなクラガートのことばに伴っていた無意識の微笑み、というよりも、しかめっ面は、ビリーの視界には入ってこなかったのも、彼は気付かなかった。そのしかめっ面のせいで、クラガートの形の良い口元が冷ややかにへの字に曲がっていた。だが、みなは、彼のことばをユーモアのつもりでいったものと受取り、そうであれば、上官のことばなので、「面白がっている振りをして」わっと笑う義務があり、その義務に従って行動した。そして、ビリーは、自分が「ハンサム・セイラー」であるということについてさりげなく言及されたことで満足していたのかもしれないが、楽しげにみなと一緒に笑った。それから会食仲間に話しかけて、「ほら、ジェミー・レッジズがぼくに反感をもっているなんてうそじゃないか！」と叫んだ。

「で、彼がお前に反感をもっているなんて、だれがそんなことをいったんだい、美青年さん？」と、ドナルドという男がやや驚いて尋ねた。そう尋ねられて、前橋楼員は少しとまどったような表情を浮かべた。というのも、先任衛兵伍長が、どんな奇妙なやり方にせよ、彼に反感をもっているという、彼にとっては煙のせいでぼんやりしているような考えを口にしたのは、「煙の中を切り込め」ただ一人だったということを出したからだ。その間、例の役人は、また歩き始めながら、心のうちがそのまま現れた、苦笑いよりも警戒の解かれたある表情、おそらく、多少ゆがんだ表情をちよつとの間示していたに違いなかった。というのは、太鼓係の少年が一人反対側からあたりに注意を払わずはしゃいでやってきて、彼の体に偶然軽くぶつかったとき、彼の顔つきを見て、奇妙にどぎまぎしたからだ。その役人が、衝動的にむちでするどい一撃をその少年に与え、「ちゃんと前を見て歩け！」と激しく叫んだときにも、少年の受けた印象は弱まらなかった。

11

前任衛兵伍長はどうしたというのだろうか。そして、どうしたというのであれ、そのことと、こぼれたスープ事件の前には、職務上であれ、他のかたちであれ、彼が一度も特別な接触をしたことがなかったビリー・バッドとどんな直接の関係があったというのだ。商船の「平和を実現するもの」としてほとんど立腹させたいと思ったこともなく、クラガート自身の表現においてさえ「かわいくて気持ちのいい若者」であったビリー・バッドに、まったく、そのことはどんな関係があったのだろうか。ほんとうに、ジェミー・レグスは、なぜ「ハンサム・セイラー」に対して、あのダンスカーの表現を借りるとすれば、「反感をもっていた」のだろうか。だが、眼識のある人間なら先の偶然の出会いからはっきり理解するかもしれないが、彼は心の底では、意図がないというわけでは絶対になく、ビリーに対して密かに反感をもっていた。確かに反感をもっていたのだ。

ところで、クラガートのより私的な経歴にかかわることで、ビリー・バッドに関係していて、そしてそれについてはビリーがぜんぜん知らないこと、クラガートが若い水兵のビリーを認識し始めたのは、七十四砲艦で彼を見かける以前のある時期だったということを暗示している、ある空想小説的な出来事を創り出すことはそんなに難しいわけではなく、事件にひそんでいるように見える謎がどんなものであっても、多少とも興味を抱かせるやり方でそれを説明することに役立つかもしれない。だが、実際には、そのようなことは何もなかった。だが、唯一それに帰すべきべきものとして必然的に想定される原因は、まさにその現実性の点で、『ユードルフォ城の秘密』の作家の創意が工夫することのできたどの原因にも劣らず、あのアン・ラドクリフ風の空想小説の主要な要素、つまり、不可思議なもので満たされている。というのは、ある例外的な人間のなかに、ある他の人間がどんなに無害でも、まさにその無害であること自体によって呼び起こされるのではないとすれば、その人間の単なる外観によって呼び起こされるような、自発的で深い反感ほど不可思議性を帯びることができるものはない。

ところで、異なった個性の持ち主が対置されれば、いらいらした気分が生じるものだが、要員が欠員なく配置された、航海中の巨大な軍艦の上で見られるような形で、異なったさまざまな個性の持ち主が対置されていていらいらした気分を引き起こすことはほかではあり得ない。そこでは、くる日もくる日もあらゆる階級の間で、ほとんどすべての人間が、自分以外のほぼすべての人間と多少とも接するようになっている。まったく、そこでは、しゃくに障る対象を見ることさえも避けようとするなら、その対象を旧約のヨナのように海に投げ込むか、自ら海に身を投げるかしなければならない。こういったことがつもり積もれば、ある例外的な人間、聖人の正反対の人間に、いかに作用するかを考えてもらいたい。

しかし、普通の人がクラガートを十分に理解するためには、以上のようなヒントだけでは不十分である。普通の人から彼へと移行するには、「その間にある越し難い空間」を渡らなければならない。そして、これは間接的方法でなされるのが一番よい。

ずいぶん昔、わたしより年長のある正直な学者が、彼自身と同じく今や他界しているある人物について、次のようにいった。（その男はとても非のうちどころのない立派な人だったので、一部の人々の間ではささやかれていたことがあったにせよ、彼を批判するようなことがおおっぴらにいわれるようなことはなかった。）「確かに、何某は女にたぶらかされることなどない男だ。私がいかなる組織化された宗教の支持者でもないこと、いわんや、いかなる体系づけられた哲学をも支持する者ではないことは君の知ってのとおりだ。だが、それにもかかわらず、「世間について知識」として知られていることだけを手がかりにして何某の中に入り込んでみようとする、彼の迷宮のような内部に入り込み、そしてそこから抜け出してみようとすることは、少なくとも私にとっては、ほとんど不可能なことだと思われる。」

「ですが、並はずれた研究対象だと思う人がなかにはいたとしても、何某も人間であることに変わりはないし、世間についての知識は人間の本性についての知識、さまざまな人間の本性の大半のものについての知識を確かに含んでいますよ。」と私はいった。

「それはそうだが、ありふれた目的に役立つ、人間の本性についての薄っ

ぺらな知識だけだ。より深いものについては、世間を知ることと人間の本性を知ることが、同一の心の中に同時に存在するかもしれないが、でも、どちらも、もう一方がほとんどなくても、あるいはまったくなくても、存在することがあるような、お互い別の知識の部門ではないだろうか。それどころか、普通に世間の事に明るい人の場合、その人が絶えず世間と接触していくことが、邪悪な人物であろうと、あるいは、善なる人物であろうと、例外的な人物たちの内にある本質的な要素を理解するために絶対必要な、より鋭敏な精神的洞察力を鈍らせてしまう。やや重要な事件のことで、私はある若い娘が老弁護士を手玉にとるのを見たことがあるんだ。おいらくの恋のせいで惚けてしまったわけでもなかった。そんなこととはまったく違っていた。だが、その弁護士は法律ほどにはその若い娘の心を理解してはいなかったのだ。法学者のヨークとブラックストーンが、ユダヤの大予言者たちほど、精神の薄暗い奥底に光を注ぐことはほとんどない。それで、あの予言者たちは、どういった人物だったのか。たいていは世捨て人たちだったんだ。」

その当時、私はたいそう未熟だったので、こういった考え方全体がよくはわからなかった。今だったら、おそらくわかっているといえるかもしれない。確かに、聖書に基づいた例の語彙群がいまだ人気があるなら、ある種の並外れた人たちを定義したり、彼らに呼称をつけたりするのにそう苦労せずにするのであろう。だが、実情はそうではないので、聖書的要素があるという非難を受けずにすむような何らかの権威に頼らなければならない。

プラトンの原典に忠実な翻訳書に、プラトンの作だと考えられているさまざまな定義の一覧表が出てくるが、そこに、「自然な墮落性＝生来の性質による墮落性」という定義が示されている。この定義は、カルビン主義の匂いがするけれども、人類全体にかかわるカルビンの教義を意味してはいない。明らかに、その意図するところにより、特定の個々人に対してのみ当てはまるのである。絞首台で処刑される者や監獄に投獄されている者には、この墮落性が見られることは多くない。とにかく、その中には獣性という下卑たものが混じっておらず、高い知能によっていつも支配されているのだから、注目すべき例を探そうとするのであれば、どこか別の場所へ行かなければならない。文明生活は、とくに比較的厳格なタイプであれば、この自然な墮落性

にとって都合がよい。それは、自身を立派な世間体というマントで包む。それは、無言の援軍として役立つ、ある種の消極的美徳をいくつかもっている。それは、ワインが警戒区域に入ってくることをけっして許さない。それは不道徳な行為やちょっとした違反行為を含まないものだといってもいい過ぎではない。それには並外れたプライドがあって、こういったものを締め出すのである。それはけっして金銭づくであつたり強欲であつたりはしない。要約すると、ここでいう墮落性とは、下劣なことや肉体的快樂という側面は一切もたない。それは、生真面目だが、辛辣さはない。この墮落性のために人類の評判がよくなるわけではけっしてないが、かといって悪くなるわけでもない。

だが、いくつかの顕著な例において、そんなにも例外的な人物を際立たせる重要な点は、次のようなことである。その人の落ち着いた気質と分別のある態度は、理性の法則にとりわけ従っている精神をそれとなく示しているようだが、にもかかわらず、その人は、心の中では、その法則の適用をまったく受けず、荒れ狂っているようだ。明らかに、その人は、非理性的なことを達成するために、とても便利のよい道具として理性を利用すること以外に理性とはほとんど関係をもたない。すなわち、このような人は、非道の理不尽さにおいて、狂気を思わせるような目的の達成に向けて、聡明で理にかなった、冷静な判断力を働かせる。こういう人たちは狂人であり、しかも、最も危険なタイプの狂人である。というのは、かれらの狂気は連続的ではなく、時折起きるもので、ある特別の対象によって呼び起こされる。それは、自分を護るように秘めやかであり、自制的といってもよい程である。さらに、その結果、狂気が最も活発であるときでさえ、平均的な人には正気との区別がつかない。それも、上に述べたような理由のためである。狂気の目的がなんであろうと、方法と表面上の行動はいつも完璧に理性的である。しかも、目的が明らかにされることは決してない。

ところで、クラガートは、多少こうした面のある人間であつた。彼には邪悪な性質をもつ異常な熱意が見られたが、それは、邪悪な教育とか退廢的な本とか不道徳な生活とかによるものではなく、生まれながらに内在していた。つまり、プラトンがいうところの「生来の性質による墮落」である。

お前は謎めいたことをいう、という人もいるだろう。だが、なぜそうなのか。それは、私が知っていることが聖書の「不法の秘密」という文句をやや思わせるからなのか？ かりにそれを思わせるとしても、それは決して意図されたものではない。というのも、それを思わせることは、この数ページを現代の多くの読者に勧めるものにはとてもならないだろうから。

この章が必要となったのは、物語の核心が前任衛兵伍長の隠された本性へと向いたからである。あの会食場での事件とのつながりで、一つ二つ手がかりを加えながら、物語を再開し、物語に対する信用が得られるかどうか、ともかく、なりゆきに任せざるを得ない。

12

クラガートの容姿に不都合はなかったし、彼の顔も、顎を除いては端正であったことはすでに述べた。これらの人の好感を得るようないくつかの点に、彼が気付いていないようには見えなかった。なぜなら、彼はこぎれいに行っているだけでなく、服装にも慎重に気を配っていたからだ。しかし、ビリー・バッドの容姿は英雄的であった。もし彼の顔に、青白いクラガートの顔のように高い知能を示すまなざしが見られなかったとしても、光の源は違っていたが、それでもやはり、クラガートの顔のように、内面から輝いていた。彼の心のなかのかがり火が、ばら色に日焼けした頬を輝かせていたのである。

この二人の容姿の際立った対比からすれば、次のように考えてまず間違いはなかろう。すなわち、さきほどの場面で、前任衛兵伍長が、ビリーに「見目より心」ということわざを当てはめたとき、それを聞いた若い水兵たちは気付かなかったのだが、ビリーに対する反感を自分に初めて起こさせたものについて、つまり、ビリーの容姿の顕著な美しさについて、皮肉なほめかしをつい口にしてしまったのである。

さて、妬みと反感は、理屈の上では両立しない激しい感情であるが、実際には、一度に誕生したチャンとエンのように連結して現われるかもしれない。そうだとすれば、妬みはそれほど奇怪なものなのか。罪状認否を問われて、

刑罰の軽減を期待して、さまざまな恐ろしい行いに関して有罪であると認めた者はこれまで多くいるが、いったい、本気で妬みの感情を一人でも認めた人がいただろうか。妬みには、凶悪な犯罪よりもさらにもっと恥ずべきものだとして万人に感じさせるような何かがある。しかも、だれもが自分は妬みとは無縁の存在だと主張するだけでなく、より優れた人たちは、ある知能の高い人が妬みの感情をもっているとだれかが本気でいっても、信じようとはしない。しかし、妬みの在りかは心であって頭ではないのだから、いかに知能が高くても妬みを感じぬようにはなれない。だが、クラガートの妬みは決して低俗な次元の妬みの感情ではなかった。また、ビリー・バッドに向けられたとき、クラガートの妬みには、心をかき乱して、美しい若きダビデのことをくよくよ思い悩むときのサウル王の相貌を損なった、あの気をもませるような嫉妬のような側面はなかった。クラガートの妬みは、もっと根が深いものであった。彼がビリー・バッドの美貌、陽気な健康、そして、若い生命力を率直に楽しむ様子を疑いの目を見たのなら、それは、これらのことが、彼が磁気作用によって感じたように、その純真さのゆえに決して悪意を抱いたこともなく、あの反発する蛇に噛まれた経験もまったくなかった性質に付随していたからであった。クラガートから見ると、ビリーの中に宿っていて、窓から外を見るように青空のような色の両目から外を見ていた精神、日焼けした頬にえくぼを作り、関節を柔らかくし、黄金色の巻毛に揺れている、あの口では表現できぬ精神こそが、ビリーを著しく「ハンサム・セイラー」にしたものであった。『ベリポテント号』上で、ビリー・バッドが示していた道徳的上の並外れた現象を十分に正しく理解する知的能力があったのは、一人を除いて、おそらく、前任衛兵伍長のみであった。そして、その洞察力はただ彼の妬みの感情を強めるのみだった。そしてその妬みの感情は、彼の中でさまざまな秘密の様相を帯びたが、ときおり、天真爛漫を、ただ天真爛漫でしかないことを冷笑的に軽蔑する気持ちという様相を帯びたのだ。けれども、美的感覚により、彼はその天真爛漫の魅力を、その天真爛漫からくる、勇気ある、のんきな気質を理解し、喜んでその天真爛漫を共有したかったのだが、彼はそれは自分には決して手に入らないものと思ってあきらめたのである。

彼は、自分の中の根本的な悪をととても容易に隠すことはできたが、それを

打ち消す力はもたなかった。善を理解する力はある、自ら善になる力はなかった。クラガートがもっていたような性質は、そういった性質の場合はほとんどいつもそうなのだが、エネルギーを過剰に付与されており、それ自体に立ち返って、神のみに責任があるサソリのように、それに割り当てられた役を最後まで徹底的に演ずること以外に、何も頼みとできるものは残されていない。

（次号完結予定）

注記：本稿は Harrison Hayford と Merton M. Sealts, Jr. の手になる、いわゆるシカゴ大学版の *Billy Budd, Sailor* (1962) の本文の前半を訳出したものである。本稿の元となったものは、大阪女子大学大学院英語学英米文学専攻における「米文学演習 I」の授業のための作業として、辻坂伸子、南茂由利子の両名が今年度分担して作成した訳稿であるが、その訳稿を三人で検討してより正確なものに仕上げたのち、私がさらに独自に大幅に改変して本稿を作成した。したがって、最終責任は私にあるが、本稿はそもそもこの両名のたゆまぬ努力があってはじめてこのような形にまとめられたわけであり、ここにそのことを記して、両名に感謝する次第である。なお、最終的に私が独自に改変するにあたっては、『バートルビー／船乗りビリー・バッド』（東京：南雲堂、1960）および『ビリー・バッド』（東京：岩波書店、1976）に収められた翻訳を参照したが、いずれも原文から相当隔たった部分を数多く含んでいることが判明した。そういった理由もあって、本稿では、あえてあまり小細工を弄せず、私が原文をどのように読み取っているかということを明確に伝えることを最優先させたこととお断りしておく。また、今回は、いわゆる訳注を付記しなかったこと、また、本来は訳注で触れるべき内容の一部を本文に組み入れたこともお断りしておきたい。